# 総論 1
# ［針灸治療の原理と原則］

古代の針灸学家と針灸医師は長期にわたる臨床の中で，より多くの疾病を治癒させるために，たえず針灸治療の原理についての研究に大きな精力を注いできた。その結果，針灸治療の原理は，主として経絡を通じさせ，虚実を調節し，陰陽を調和することにあるという認識に至った。そして，この認識を基礎としながら，中医学の基本理論と関連させて，針灸の治療原則をも規定している。

# 1．針灸の治療原理

## 1 疏通経絡，調和気血（経絡の疏通，気血の調和）

経絡は体内の臓腑を連絡し，肢体の内外を連絡するパイプであり，気血津液を運行する通路である。栄養作用のある気血は，経絡の通りが正常であれば，全身に輸送される。正常な生理下では，経絡はスムーズに通じており，気血は止まることなく流れており，休むことなく循環することにより人体の健康を維持している。しかし外因や内因などの作用により，経絡の正常な状態が影響を受けると，一連の病理変化が生じる。

針灸は経穴を刺激することにより，経絡の運行障害を改善して正常な状態に回復させ，運行障害により生じた病理反応を除去する作用がある。これが疏通経絡，調和気血の作用により生じる針灸の治療効果である。中医学では多くの疾病の発生・発展・変化は，すべて経絡気血の運行状況と密接な関係があると考えており，針灸の経絡・気血に対する疏通作用と調和作用が，針灸治療の広範性と通用性を決定している。

例えば，「痛証」の基本病理は経脈の気血不通にあるが，針灸の疏通作用により「通ずれば則ち痛まず」という治療効果を収めることができる。したがって各種疼痛は，針灸の主な適応症の1つとされている。

## 2 補虚瀉実，扶正去邪（虚を補い実を瀉す，正気を助け邪気を去る）

疾病の発生・発展・変化の過程は，事実上は人体の正気と邪気の絶えまない闘争の過程である。邪気と正気の双方の偏盛偏衰は，疾病の虚証と実証という2つの基本類型を形成する。そのうち虚証は，主として人体の正気の不足による証候であり，実証は主として邪気亢盛で正気がまだ虚していない証候である。

正気の強弱，邪正闘争の勝敗は，疾病の進退，予後の善悪に直接かかわっている。正気が邪気に勝れば，病勢は弱まるが，逆に邪気が勝って正気が弱まり抵抗できなくなると，病勢は進展し，生命の危険をまねくことにもなる。

針灸は適切な経穴を選穴し，それに相応する手法を施すことにより，補虚瀉実，扶正去邪の作用を収めることができる。補虚扶正と瀉実去邪は，針灸治療の重要な法則であり，また相互に関連しあっている。すなわち邪を去ることにより正気を助けることができ，邪気による正気への傷害を防止することができる。また正気を助けることにより邪を去ることもできる。強大な正気の攻勢の前では邪気は無能となり，しだいに邪気は消退する。





例えば，平素から足三里に施灸すると，各種疾患を予防することができるが，これは扶正強壮の作用によるものである。また発汗や鎮痛は，去邪による作用である。

## 3 陰陽の調整，偏向の矯正

疾病は，体内の陰陽のバランスが発病因子の作用により失調するとおこる。これは陰陽の偏盛または偏衰の証候として現れる。針灸には，陰陽を調整し，偏向を矯正する作用がある。例えば，陽盛陰虚に対しては，手足三陽経脈を瀉し，手足三陰経脈を補い，陽虚陰盛に対しては，手足三陽経脈を補い，手足三陰経脈を瀉すとよい。このようにすると，比較的早く，有効に病痛を解除し，陰陽のバランスを回復させることができる。多くの患者は，針灸治療を受けた後に，気持ちがすっきりし，食欲が増進し，耳や目がはっきりし，身体が壮快になるなどの変化が生じるが，これは体内の陰陽が調整され，新しいバランスにより生じた感覚である。

内反足には照海を取り，外反足には申脈を取穴するが，これは経脈の陰陽のバランスを調節するという道理にもとづくものである。

以上，針灸治療の原理について，3つの内容を述べたが，これらは中医学の基本理論にもとづいたものであり，マクロ的に分析したものである。この3つの内容は，互いに関連している。針灸による治療効果は，この3つの内容が共同して作用を発揮するものである。

# 2．針灸の治療原則

針灸の治療原則は，一般的に次の4つにまとめることができる。

1．補虚と瀉実
2．清熱と温寒
3．標治と本治
4．同病異治と異病同治

臨床においては，まず正確に弁証し，疾病の陰陽・表裏・虚実・寒熱を明確にし，その後に上述した針灸の治療原則にもとづいて治法，処方配穴を確定して，治療を行う。

## 1 補虚と瀉実

針灸治療において，補虚と瀉実には次の2つの内容がある。1つは治法を指す。これは疾病の虚実の属性に応じて，具体的に補瀉の方法を確定し，立法，処方選穴を指導するものである。1つは補瀉の手法を指す。これは各種の補虚または瀉実の刺針手法を運用して，治療の目的を果たすものである。この2つには区別があるが，関連もしている。ここでは治法について述べる。

虚実という概念は，正気の強弱，邪気の盛衰を概括・弁別する2つの綱領である。虚証は正気衰弱により出現する病変と証候を指しており，実証は邪気が盛んで正気が衰退しておらず，正気と邪気が抗争して出現する病変と証候を指している。

疾病の病位の違い，邪気の種類と性質の違いにより，虚証と実証の現れかたはそれぞれ異なってくる。さらに虚証と実証は，一定の条件下で同時に見られることがあり，また相互に転化することもある。このような複雑かつ多様に変化する状況に対して，医師は弁証を明確に行い，適切な治法を選択しなければならない。

### ［1］補虚

補虚法は，気・血・津・液・臓・腑・陰陽の各種程度の異なる虚弱に適用する治法である。また機能不全の時にも適用する治法である。補虚法には，陽気の昇提，陽気の回復，陽気の鼓舞，原気の調節，陰気の保護，陰血の化生，臓腑の補益，脳髄の補益，筋骨を強壮にするなどの多方面の作用があり，したがって使用範囲も非常に広い。具体的な補虚法は，次の3つに帰納することができる。

#### 【1】その本経を補う

その本経を補うとは，ある臓腑が虚弱である場合，それに相応する経絡から経穴を取穴し，





補法を施すことをいう。例えば，心虚である者は手少陰心経穴を取り，脾虚である者は足太陰脾経穴を取り，肺虚である者は手太陰肺経穴を取り，それぞれ補法を施せばよい。臨床上は，一般的には本経の原穴と該当する背兪穴を主に選穴する。

#### 【2】表裏経を補う

表裏経を補うとは，ある臓腑が虚弱である場合，それと表裏関係にある経絡の経穴を取穴し，補法を施すことをいう。例えば，脾と胃は表裏関係にあるが，脾虚の場合は足陽明胃経を補い，反対に胃虚の場合は足太陰脾経を補う。また肝と胆は表裏関係にあるが，肝虚の場合は足少陽胆経を補い，胆虚の場合は足厥陰肝経を補うという方法である。この法の具体的な選穴原則は，「その本経を補う」の法と同じである。

#### 【3】虚すれば則ちその母を補う

「虚すれば則ちその母を補う」という方法は，臓腑間の五行の相生相克関係にもとづき制定されたものである。子である臓腑が虚弱である場合は，その母である臓腑を補うことにより，補虚の目的を果たすことができる。

例えば，土は金を生じ，脾胃は土に属しており，肺は金に属している。肺臓が虚している場合は，足太陰脾経穴と足陽明胃経穴を取るとよい。あるいはその土に属する経穴を取り，母臓を補うこともできる。また手太陰肺経の土に属する母穴（太淵）を取り，これを補ってもよい。さらにこの2つを同時に応用してもよい。

補虚法は，刺針と灸法を採用することができる。ただし病証の違いにより，針と灸はそれぞれに適応がある。例えば，気虚陽虚に対しては，灸法が多く用いられている。あるいは針灸を併用する。血虚陰虚に対しては，一般には針法が多く用いられている。特に陰虚でさらに陽亢である患者には，灸法は適していない。

### ［2］瀉実

瀉実法は，気機阻滞によりおこる各種の疾病に適用する。例えば，気滞湿阻，気鬱化火，寒凝気滞，気逆して厥する者に適用する。また臓腑の気機の阻滞によりおこる脾阻生痰，肝鬱気滞，心火亢盛，相火妄動などに適用する。

瀉実法で選穴される経穴には，通・開・散・降などの効果をもつものが多く，解表退熱，裏熱の清瀉，二便の通暢，利水逐瘀，平肝醒神，行気解鬱などの治療作用が生じる。具体的な瀉実法は，次の3つに帰納することができる。

#### 【1】その本経を瀉す

その本経を瀉すとは，ある臓腑に実証が現れた場合，それに相応する経絡の経穴を取り，瀉法を施すことをいう。臨床上は，一般的に本経の募穴，合穴が多く選穴され，急性実証では，

さらに郄穴，井穴などが選穴される。

### 【2】表裏経を瀉す

表裏経を瀉すとは，ある臓腑に実証が現れた場合，それと表裏関係にある経絡から経穴を選穴し，瀉法を施すことをいう。例えば，肝実証には足少陽胆経穴を選穴し，瀉法を施し，胃実証には足太陰脾経穴を選穴し，瀉法を施すとよい。臨床上よく用いられる経穴は，「その本経を瀉す」で述べたものと同じであるが，とりわけ絡穴の応用がここでは重要である。

### 【3】実すれば則ちその子を瀉す

「実すれば則ちその子を瀉す」という方法は，五行の相生相克理論にもとづき制定されたものである。例えば，肺は金に属しており，腎は水に属しているが，肺経実証に対しては，この原則にもとづき足少陰腎経穴に瀉法を施すとよい。例えば水に属する陰谷を瀉すとよい。また本経の子穴を取ることもできる。例えば，肺実証には手太陰肺経の尺沢（水に属する）を取り，瀉法を施すとよい。

瀉実法は，一般的には刺針を主とするが，実証で熱象がない者には，灸法を併用してもよい。実寒証には灸法は不可欠である。刺針と同時に抜火罐を併用し，寒湿の邪気の排泄を促すこともできる。また邪熱が非常に強く，病状が急迫している患者に対しては，邪を瀉して解熱させる力を増強するために，刺針と同時に刮痧療法を併用することもある。

## ［3］補瀉兼施

補瀉兼施法は，主として虚実挾雑の病証に適用し，同時に扶正と去邪の2つの作用が生じる。去邪により正気を損傷することもなく，扶正を行ったことによって邪が残るということもない。臨床上は，虚実挾雑の症例は非常に多く，したがって本法の応用範囲は非常に広い。

例えば，肝強にして脾弱の者には，胸脇脹痛，噯気，酸水を嘔吐するなどの肝強による症状が見られ，また腹満，食欲不振，大便溏薄などの脾弱による症状も見られる。治療においては兼治する必要があり，足厥陰肝経と足少陽胆経を瀉し，足太陰脾経と足陽明胃経を補う補瀉兼施の法が用いられる。

また腎陰不足で心火亢盛の者には，心悸，不眠，遺精などがおこるが，この場合は，足少陰腎経を補い，手少陰心経を瀉すとよい。

本法を用いる場合には，さらに虚実の程度，緩急にもとづき，補瀉の強さ，順序を決定する必要がある。例えば，虚が多くて実が少ない者には，補を強くする「補二瀉一」または「先補後瀉」の方法を用い，実が多くて虚が少ない者には，瀉を強くする「瀉二補一」または「先瀉後補」の方法を用いる。また同じ経穴に「先補後瀉」または「先瀉後補」の手法を用いることもある。このように患者の虚実の状況にもとづき，適切な補瀉法を採用すれば，病機に的中し，よい治療効果を収めることができる。